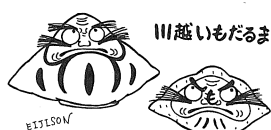


れば知るほど、厳しさが伝わってきます。それだけに意識して明るい話題になるようつとめました。そんなに甘くないぞ、としかられるかもしれませんが、6年前の鹿児島県のサツマ

イモも同じでした。他人まかせにせず自から動くべきです。ジャガイモはそれに値する作物ですから。

特集2

さつまいも資料館を オープンしてみても



サツマイモ資料館長

山田 英次

1. 来館者の反応は

今年の4月20日にサツマイモ資料館をオープンして数ヶ月たってみました……

「キャー、ヤダー、イモのキャラメルがある。オイモの味がするのかしら——」

「ほら、イモのラーメンまであるワ」

「ナ～ニ、この“いもぼう”って。いもようかんみたいネー」

「ヤダー、イモこけしだって。面白～い」

「ネッネッ、オイモちゃんのクッションまである。スイートちゃん(キャラクター)って、かわいい」

「怪獣イモラスだって、アッハッハッ」

これが、イモづくしの当資料館へ足を踏み入れた来館者の、特に若い女性達の反応である。来館者の7～8割方が女性の観光客であるが、その人達は90%以上、面白がって笑って帰る。

隣の日本料理店「いも膳」へ、いも懷石を食べに来て、待ち時間を利用して資料館を見学するシステムになっているのだが、館の一階が全国のサツマイモ商品展示販売になっ

ているため、資料館というよりオイモ土産店といった印象が強い。客は、土産の売店と思っ

て、オイモのお菓子類を買いあさる。逆に、二階のサツマイモ資料展示室をじっくりと見て帰る人達がいるが、これは一人でやってくる関心度の高い男性客に多い。

とにかく、35坪程度の狭い資料館を5～10分程度見学して、サツマイモに対する認識をあらたにして帰るようだ。

2. なぜ、川越にサツマイモ資料館が……

今年1月に、私は長年勤めた市役所を辞め、イモ資料館オープンのためにいも膳へ転職したが、まわりの友人達は、そのとき、「何故、役所を辞めてまでもいも膳へ行くのか。危険だから、考え直せ」「安定している役所を辞めるなんて、ずいぶんと思いきりがいいが、将来は大丈夫か」などと、いろいろと忠告を受けた。

しかし、今まで約7年間、川越のイモ文化活動をして来て、川越いも友の会の夢は、川越にサツマイモ資料館をつくることだった。ここ2～3年、川越市内でも「イモを商品看

▶ サツマイモ資料館



板の一つに」という店が数多く増えてきてはいたが、(イモによる マチづくり的ムードも出てきてはいたが)行政サイドとしては、(いろいろ市民運動としてイモ文化活動をやった、こちらから援助を求めたこともあったが)もはや川越は産地ではないので、行政として取り上げる必要性もないという態であった。市としては伝統的作物、又は観光資源としての「イモ」をどうするかという考えは、全く持ちあわせていなかった。ひとつの例として、現在建設中の市立博物館のなかにも、市をPRするようなサツマイモ展示コーナーを期待したが、結局は、甘藷功績者一名の人物紹介だけという結果である。

いも膳の主人・神山正久氏は、会発足当時よりいも友の会の会員でもあった。以前より会の先生方に、資料館を建てたらという強いアドバイスを受けていた。氏の夢は、いも膳を経営的にも、他の料理店と違って個性化し、更に観光客を常時呼べるような施設が欲かった。よって、土地から購入の大借金を抱えての挑戦となり、当初より資料館の展示企画を任された私も、責任をとって生活を賭けた挑戦となった訳である。よって二人とも、イモへの冒険でもある。

しかしながら、経営としては「いも膳の店舗の一つ」ではあるが、資料館が出来たことにより、観光地化を進める川越にとっては良い特色が出、充分「川越のイメージ・アップ」になっていると思われる。また、川越のイモ文化活動を続けるひとつの基盤にもなりうると思う。更に、一般の人達への、イモ情報提供の場にもなりうると思う。

このように資料館は、「いも膳の経営戦術の一つとして」「川越にとっては、より観光イメージを上げるため」「一般の人達へは、イモの認識を改めさせる情報提供の窓口として」「更に、イモ文化活動を支える一施設として」などという役目があると思われる。

3. これからどのような事業をするのか

資料館の事業としては、一応、世間に対し

- ①サツマイモの資料展示
- ②学習等の情報サービス
- ③サツマイモ商品の展示販売
- ④企画事業(只今、模索中)
- ⑤資料収集、イモ文化研究
- ⑥研究誌・イモ資料等の発行
- ⑦協力団体などへの援助

を唱えているが、なにせ民間企業であるので、館としては私一人、事業運営費ゼロとい



◀ 展示室

った状態である。オープンしたものの、この先一体、何が出来るのか、悶々として過ごす日々が多く、心に向かって「ガンバラナクチャ、一発当てて、お金を儲けて事業費をつくらなくちゃ」と念じるばかりである。

役所にいた時は公民館の職員であったが、戦後の公民館創立期当時は、青空公民館というものがあった。モノも無い施設もないお金も無いという状態の時のものであるが、気持ちとしては「青空イモ学校でもやるか」といった気にもなっている。

しかしながら、館報をチラシ程度で発行したり、来館者へはイモの紙芝居をつくってみせようか、などとも考えている。そして、川越のイモの先生方の協力を得て、情報交換のためのイモ懇話会などもやろうかと考えている。

いずれにしても、金も全くかけないで、スタッフが無くても出来るようなことを、ぜひいろいろ御助言いただきたい。

4. 夢、夢、夢……

日々悶々としてはいるが、資料館長として失意にある訳ではない。金も無く、スタッフも無いが、夢は抱いている。顔や口には出さないが、心の奥では「いまに見ておれ」と思っている。

まだ資料館としては計画の半分の施設だけである。一発ホームラン商品を出し、資金を儲けて、あと半分の計画施設（資料保存室、事務所、企画展示室兼休憩室、倉庫など）をつくり、人材とスタッフを確保し、目標としている資料館の機能を、みんなのために完全化したいと思っている。

そして、更にたくさん資金を儲けて、将来

は「サツマイモは最も楽しい文化であることを体験させる“スイートポテトランド”又は“ベジタブルランド”」のような文化娯楽施設をつくりたいと夢みている。

「阿呆か」と思われるかもしれないが、イモの文化を大きく成長させるためには、栽培や学問や加工技術や調理技術や流通のみだけでなく、現状を大きく越えて、一般庶民に「サツマイモを毎日楽しく食べちゃおう」と観念的にイメージ化させる浸透力のある存在が必要である。資料館だけがアピールしても無力である。遊びながら、食べながら、親しみながら、体験的に楽しくサツマイモのイメージを変えていく主力となる施設が必要である。

更に、全国のイモ愛好者を集めて「さつまいも党」なる情報をつくってみたいとも思っている。このように夢はふくらむばかり…。

5. では、その一步一步は……

さて、大きい目標（夢）を達成するためには、現実の目の前の目標を一步一步実現化していかなければならない。そのために何をしているかということ、イモのホームラン商品を出すために、商品開発企画（案）をひたすら書きためている。チャンスはいつか訪れるものである。とりあげてくれる企業や人が出てくると思っている。

とにかく、うしろでイモ神様が応援してくれているのだから、ガンバラなくちゃと思っている。

6. ぜひ、みんなでご利用を

サツマイモ資料館は、いも膳のみのものではないし、川越のみのものでもない。広くサ

ツマイモ関係者に利用していただきたいと思っている。

つまり、「当社ではこんなイモ製品をつくってみました」、また、「当方では、このような資料をつくってみたが……」などというものは、ぜひ展示してPRしていただきたいと思っている。更に、「こんな情報が欲しいが」という問合せに対しても、なるべく要望に沿うようにキチンと答えたいと考えている。何

いも類振興に尽くした人々(1)



川越の甘藷先生
赤沢仁兵衛

川越いも友の会理事 井上 浩

川越のサツマイモの先生

関東で「サツマイモの先生」といえば、青木昆陽だが、川越地方の甘藷農家にとっては、もう一人先生がいる。赤沢式甘藷栽培法で有名な、赤沢仁兵衛^{あかざわにへえ}(天保8年～大正9年)だ。農山漁村文化協会の『明治農書全集 第1集』、『第4巻 畑作』(昭和60年)に、晩年の彼がまとめた『赤沢仁兵衛実験甘藷栽培法』(明治43年初版、同45年再版)が入っている。そしてその意義を、編者の山田龍雄氏がこう書かれている。

「明治期のサツマイモの専門書で、系統的に書かれたものは意外なほど少ない。全国で3冊ほどしかないが、その中で赤沢氏のものが一番意味がある」と。

サツマイモ裁判

赤沢仁兵衛は天保8年(1837)、今の川越市

か相談事があれば、真剣に対応したいと考えている。

どこまで私自身が出来るか、未知数の部分が多いが、ぜひ、友達感覚で資料館を利用していただきたいと考えている。

いずれにしても、ぜひ一度おいでになって、いろいろとお話しをしていてもらいたいと思っている。

今福739番地に生まれた。天保といえば、すでに川越イモが日本一のイモになっていた時だ。

彼の略歴は、『赤沢仁兵衛実験甘藷栽培法』の初版本にある。同書は今福の有志が刊行会を作って出したものだが、その会の名で「赤沢仁兵衛君略歴」を載せている。有名なサツマイモ裁判事件は、ここにある。

それによると仁兵衛は慶応元年(1865)、同じ今福の147番地の赤沢家の婿養子になった。

ところでその畑は少なく、5反ほどしかなかった。いわゆる「5反百姓」だ。しかも当時としては大金の、800円もの借金を抱えていた。

ふつうのことでは、とうてい家を興すことのできないことを知った仁兵衛は、当時、もっとも有利な商品作物とされていた、サツマイモの増収を図ることとし、必死で研究した。

すると効果はたちまち現われ、数年で従来の2倍以上も取れるようになった。

ところが畑の少ない仁兵衛がたくさんのイモを売るので、「あいつはどこかのイモを盗んでいるに違いない」と疑われ、ある人に川越の奉行に訴えられてしまった。

その時、怒った彼の妻は、「疑うなら、う